

# 子どもの内面を推察する事例検討会の在り方

—知的障害特別支援学校における子どもの学びに注目した教育実践—

○小出 博史

岡澤 慎一

齋藤 大地

（宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校） （宇都宮大学大学院教育学研究科） （宇都宮大学共同教育学部）

KEY WORDS : 内面の推察 事例検討会 授業研究

## 【目的】

知的障害のある子どもは、話の内容をうまく理解することができなったり、必要な部分に注目することが難しかったり、見通しがもてずに不安定になってしまったりすることがある。子どもがさまざまな課題に直面するなかで、いつも生き生きとした心の動きばかりではないことは想像に難くない。一人一人の学びの過程には違いがあり、それに応じた内面の変化があり、多様な姿となって現われる。

子どもの内面は、表情や仕草等といった一瞬一瞬の細かな変化に表れることから、客観的には把握しにくいものである。しかし、子どもの内面にしっかりと向き合い、子どもたちが何を感じ取り、何を思い、何をしたのかという、ふるまいや発言等といった客観的な事実と、教師による内面の推察を結びつけて豊かに捉えていくことは、子ども主体の学びを考える上では大切な観点となる。

さらに、学習評価の充実という観点からも、子どもの学習の結果だけで判断するのではなく、子どもが学ぶ過程を重視して評価すること、多面的に評価することを、教師間と同僚性を通して積み重ねていく必要があると考えた。

そこで、本研究では、子どもの学びの過程に注目するための方法としてエピソード記録を用いた事例検討会の在り方を検討し、実践を積み重ねることとした。

## 【方法】

知的障害特別支援学校に在籍する児童生徒一人一人の学びを見つめるための方法として、エピソード記録と事例検討会の実施方法について検討し、20XX 年 6 月から 11 月まで実践を行った。その後、実践を行った本校教師（知的障害特別支援学校）を対象に、実践に対するアンケート調査を行った。

## 【結果】

### 1 エピソード記録の検討

授業場面や学校生活全般を通して積み重ねた教育実践において、そのときに教師の心に強く残ったエピソードを記録した。その際、子どもの姿を多面的に把握するために、複数の教師で適宜記録した。

### 2 事例検討会の検討

子どもの学ぶ姿を丁寧に見取り、内面を推察しながら話し合い、今後の手立てを考えるというかたちを検討した。

子どもの内面を表現するための方法としては、子どもの「つぶやき」を想像して記載するという方法を用いた。参加者一人一人の教育観、教職経験、実践的知識や理論的知識等の違いから、様々な「つぶやき」が表現された。

実践の当事者である教師は、目指したい姿とエピソードから見える子どもの姿を重ね合わせ、今後の指導・支援に活かしていくための「問い」を立てた。教師の同僚性を活かした学び合いを通して、授業のよしあしといった単純化した議論ではなく、子ども一人一人の学びを丁寧に、かつ謙虚に解釈して、次の実践に活かしていくことを目指した。

### 3 実践（高等部 A さんの事例を通して）

小学部から高等部までの各クラス 1 名を事例対象児童生徒に取り上げ、前述したエピソード記録と事例検討会を基に、それぞれの指導・支援の充実につなげていった。こ

では、高等部の事例検討会の様子を紹介する。

A さんは、失敗することを嫌い、失敗をすると自分を責める言動が見られる生徒である。気持ちに波があり、人に対して攻撃的になることもある。そこで、友達と良好な関係を築き、落ち着いた気持ちで学校生活が送れることを目指して実践に取り組んだ。

高等部の PR 動画を作成している授業におけるエピソードをふまえて、高等部の教師 7 名で A さんの内面を「つぶやき」というかたちで推察した。「動画撮影は得意分野だ」、「自分がリーダーとなって引っ張ろう」、「話し合いにはルールがあるって、先生が言っていたな」等といった様々な思いをもって活動しているのではないかと推察した。

実践の当事者である教師は、「普段は相手を責めるような場面が見られるにも関わらず、本授業では共感的な態度が多く見られた。その要因は何か」という問いを立てた。話し合いのなかでは、「興味関心の高い学習内容を扱ったことが有効だったのでは」、「グループのまとめ役としての自覚につなげていくことがよかった」、「お互いに意見を受け入れる受容的な雰囲気があったから」、「教師は、目的を共有したり、話し合うための手掛りを与えたりする等、各々の意見をつないでいくための仲介が必要かもしれない」等といった意見を交わし、次の実践につなげていった。

### 4 取組に対する教師の評価

本実践終了後に、実践を行った教師 21 名に対して自由記述式のアンケートを行い、取組に関する評価を行った。

エピソード記録と事例検討会という実践を通して、「子どもに対する見方」について教師一人一人が考えた。子どもの内面を見取るためには、「子どもの言葉に置き換えて考える」、「つぶやきを拾う」、「表情や仕草を見取る」、「行動の前後の文脈に注目する」、「なぜかと考える」等があげられた。内面を見取ることの難しさを感じながらも、子どもの思いや考えを推察し続けることが大切であるという理解を共有することができた。

また、複数の教師で学び合う機会であったことから、一つの事実に対する解釈の違いが生まれ、それを様々な気付きにつなげることができた。

## 【考察】

教師の同僚性を活かして実践を積み重ねていくなかで、多様な思いや考えを推察できたこと、子どもの姿から次の手立てを考えていくことができたことは、成果としてあげられる。

実践を行った教師からは、改めて子どもの立場に立って考えることの大切さに言及した意見が多くみられた。特に、事例検討会に関しては、手順を明確にして、互いの意見を尊重し合う場を作ることができたことで、様々な意見を出し合うことができた。子ども一人一人の学びを丁寧に、かつ謙虚に解釈したことで、新たな気付きにもつなげることができた。

今後も、複数の教師で子どもの学びを見つめる機会を大切に、謙虚に学び合う教師集団となれるよう努めていきたい。

(KOIDE Hiroshi, OKAZAWA Shinichi, SAITO Daichi)